第２学年道徳指導案

日　時　平成16年 7月12日(月)
学　級　２年（男子11名　女子12名　計23名）
指導者　教　諭　　西　井　栄　幸

Ⅰ　主題名「集団生活の向上」　指導項目　４－（１）　集団生活の向上
資料名「明かりの下の燭台」　出典「自分を考える」　暁教育図書

Ⅱ　主題について

（１）　ねらいとする価値について

中学校の指導項目４－（１)は、「自己が属する様々な集団の意義についての理解を深め、役割と責任を自覚し集団生活の向上に努める。」となっている。

人間は、生活している上で何らかの集団に属している。人が、集団の一員としてよりよく生きていくためには、自分の属する集団の意義を十分に理解することが大切である。各人がその成員としての役割と責任を自覚して、個々が責任を果たし集団の目標を達成する中で集団の向上が図られ、自己の実現もなされる。

しかし、この集団の意義の理解や役割と責任の自覚は、理屈としては理解していても、実際の行動場面で実践していくのは容易なことではない。それは、誰にでも望む役割があり、自分の思いとは違った役割を担ったとき、自己中心的な見方しかできなくなることがあるからである。このことが原因となって集団としての統制が乱れ､集団としての力を弱める原因になることもある。

このため､どんな役割であれ､その責任を一生懸命果たすことが集団としての向上につながり、さらには自己の向上にもつながっているということを理解し、与えられた仕事に前向きに取り組み、喜びを見出すことが大切である。

（２）　ねらいにかかわる生徒の実態について

今年の６月に実施した道徳適性検査の結果を見ると、指導項目４－（１)については、Ａ（十分発達）１２名、Ｂ（おおむね発達）９名、Ｃ（発達が不十分）２名と概ね良好な結果が出ている。

学級の生徒は、明るく素直であり、言われたことはその通りにやろうとする。そのため、生徒会の委員会活動や学級の係活動についても最低限､自分の役割を果たそうとする姿勢が見られる。しかし、言われたことを、その通りにやろうとする受け身の傾向が強い分、集団の中での役割を責任をもって果たすということが、集団生活の維持、向上につながり、さらには自己の向上にもつながっているということを強く意識できている生徒はあまり多くないものと思われる。また、集団の一員としての役割は理解していても、実際には意図に反する役割になったとき、不満を抱き、自分の責任を見失うこともある。

（３）　資料について

本資料は、オリンピック優勝に貢献したマネージャーがメンバーを支える献身的な姿を描いたものである。バレーボール選手であった主人公が、チーム編成のために辞めざるを得ず、監督からマネージャーを依頼される。泣いて「いやだ」と訴えた主人公は、監督の気持ちを理解し、マネージャーを引き受ける。それ以後、泣き言一つ言わず、献身的にチームのためにつくす。

選手を陰で支え続けた主人公の生き方は感動的であり、集団での役割の大切さを考えることができる。また、マネージャーとして責任を果たした充実感や喜びは、生徒の共感を呼ぶものと考える。

Ⅲ　指導の構想

（１）　授業の概略

導入では、タンポポの実物を提示する。植物が、個体を維持し、子孫を残すために、各器官がそれぞれの役割を果たしていることや普段は表面に出ることが絶対にない根の重要なはたらきに触れることで、価値への方向づけをさせたい。また、タンポポのからだを人間の集団に置き換えて考えることで、誰もが集団の一員なのだということを想起させ、主題にかかわる課題意識をもたせたい。

展開部分の資料の提示については、場面１～３と場面４～６の二つに分割して提示する。場面１～３では、鈴木選手の献身的マネージャーぶりをしっかりおさえさせて後半につなげたい。場面４～６では、役割演技を通して、鈴木選手の心の葛藤、マネージャーを引き受ける決心をした心情に迫らせ、その後の中心発問につなげたい。中心発問では、集団の中で、自己の役割を受け止め、責任を持って最後までやり遂げようとする姿勢が、集団としての力の向上につながったことをしっかりおさえさせたい。また、鈴木選手の行動が自己犠牲ではなく、自己の価値を高めたことに気づかせたい。

終末では、授業を通して、自分の生活について振り返らせることで、集団生活の中での、自分の役割に気づかせ、貢献しようという意欲を持たせたい。

（２）　研究仮説とのかかわり

①　資料の読み取りの工夫をする。

ア．朝自習を活用し、資料の場面１～３を事前読みさせることで、鈴木選手の献身的マネージャーぶりをしっかりおさえさせる。

イ．資料の場面１～３を事前読みさせて、印象に残った箇所に線を引かせる。

②　考えをまとめて書かせる工夫をする。

ア．ワークシートを活用し、中心発問に対する自分の考えを書かせる。

イ．本時の授業を通して、自分の生き方について振り返ったことを書かせる。

③　役割演技を取り入れる。

鈴木選手のセリフを役割演技させることで、鈴木選手の心情を考えさせる。

Ⅳ　本時の展開

（１）　ねらい

①　集団生活の中で、自分の役割に気づき、貢献しようという意欲をもたせる。

②　集団の向上が、自分の存在価値を高めることに気づかせる。

（２）　展開

※　別紙参照

（３）　評価

①　集団生活の中で、自分の役割に気づき、貢献しようという意欲がもてたか。

②　集団の向上が、自分の存在価値を高めることに気づいたか。

（２） 展開

	主な学習活動	○発問　・予想される生徒の反応	指導上の留意点
導入 5分	1．自分がいる集団について考える。	○タンポポの根の長さは、どれくらいだろうか。 ・３０ｃｍ ・１ｍ ○根は、どのようなはたらきをしているのだろうか。 ・からだを支えている。 ・水を吸い上げる。 ○自分は今、様々な集団の中で、どんな役割を担っているのだろうか。	・タンポポの実物を提示し、予想以上に根が長いことを説明する。 ・普段は表面に出ることが絶対にない根の重要なはたらきについて考え、価値への方向付けをする。 ・誰もが集団の一員なのだということを想起させ、主題にかかわる課題意識をもたせる。
展開 40分	2.資料の場面１～３を読み、考える。 3.資料の場面４～６を読み、考える。	○鈴木選手が、マネージャーの仕事をいつも笑顔でやっているのは、どんな気持ちからだろうか。 ・チームを支えたい ・チームを盛り上げたい ・選手に安心してプレーさせたい ○鈴木選手の気持ちを考えながら、資料のセリフを言ってみよう。 ①「わたしはプレーをしようと思ってはいってきた。マネージャーなんかするのは、それはいやや、帰る。」 ・くやしい ・選手としてプレーしたい ②「わたしは、チームを強くするために陰で働きます。」 ・選手を支えていこう ・選手のために尽くそう ○４年間もの間、鈴木選手を支えたものはなんだったのだろうか。 ・選手を支えようという責任感があったから。 ・選手のために尽くしていることに喜びや充実感を感じていたから。 ・チームが強くなっていくことに喜びや達成感を感じていたから。	・資料の場面１～３を事前に読ませ、印象に残った箇所に線を引かせておく。 ・鈴木選手が笑顔でマネージャーの仕事をしている２枚の挿し絵を掲示し、鈴木選手の心情をつかませる。 ・①では鈴木選手の無念な気持ちをつかませる。 ・②では、鈴木選手が、泣きながらじっとすわっている１枚の挿し絵を掲示し、鈴木選手の心情をつかませる。 ・マネージャーをしているときの「笑顔」と泣きながらじっとすわっているときの「涙」を対比させることで、鈴木選手の心の葛藤やマネージャーを引き受ける決心をした心情に迫らせる。 ・自分の考えをワークシートに書かせてから、発表させる。 ・鈴木選手の行動が、自己犠牲ではなく、自己の価値を高めたことに気づかせる。 ・必要に応じて、「鈴木選手の行動は、鈴木選手自身のためにはなっていないのか。」という切り返しの発問をする。
終末 5分	5.自らの生き方を振り返り、自分の役割を果たすことについて考える。	○今までの自分の生活を振り返り、どのようなことを考えながら、自分の役割を果たしてきましたか。 ・自分の責任を果たすこと ・人に迷惑をかけないこと ・ほめられたい ○鈴木選手の生き方から、どんなことを学びましたか。 ・どんな役割も大切だということ ・自分の役割に責任をもつことが、集団にとって大切だということ ・自分の役割を果たすことが、自分の向上にもつながるということ	・自分を振り返るきっかけにする。 ・集団生活の中での、自分の役割に気づき、貢献しようという意欲をもたせる。 ・集団の向上が、自分の存在価値を高めることに気づかせる。